分布：全国

ヌカキビ　（　イネ　科）

学名：*パニカム ビスルカツム*
Panicum bisulcatum

糠黍　　別名：ミコスズ

主な生育場所

水田内，畦畔，休耕田，荒地，湿地，河川敷や水路などに普通にみられる。やや湿った環境を好む。水田周辺に多いが，陰地で湿っぽい畑や樹園地にもみられることがある。

名前の由来：　キビ（黍）のような種子（小穂）をつけるが，キビの花穂のように密にぎっしりと小穂がつかず，花序の先の側枝にまばらに小さな小穂がつく様子を糠に喩えて糠黍（ぬかきび）。

特　徴

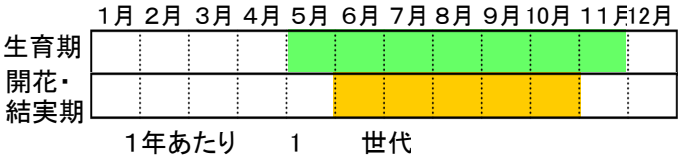
高さ30～120cmほどになる一年草。茎は細く，下部は倒れて地面を這う。節からよく分枝し直立する。葉は線形で長さ5～20cm，幅4～12mm。夏から秋にかけて茎先に大きな円錐花序を出し，花序の側枝は主軸に対して90度以上の大きな角度でまばらに小穂をつけ垂れさがる。小穂は2mm程度の長卵形で護頴と内頴に光沢がある。

＜農業との関係＞

湿った休耕田では群落を形成するが，水田内には時折散発する程度である。除草剤や中耕除草などで容易に防除できるが，初期除草に失敗し，中干し以降も草取りに入らないような水田では，多発し水稲と競合する場合もある。また，転作大豆時にも畝間の主要雑草となることがある。

左：オオクサキビ（小穂が枝に密着）　右：ヌカキビ

＜生活史＞　　関東 地方の例(目安)



＜類似種＞　外来種のオオクサキビは同じような環境に生え，形態的にもよく似ているが，花序の枝が斜めに出て垂れず，枝に密着した小穂を密につける。また種子は披針形でヌカキビの種子よりも大きい（約2.5mm）。

左オオクサキビの小穂
右：ヌカキビの小穂

＜一言うんちく＞

雑穀としてのキビはインド原産とされ，弥生時代ごろの渡来と考えられています。国内のキビ属には在来のヌカキビ，海岸に多いハイキビのほか，外来種のオオクサキビ，ギネアキビ，ニコゲヌカキビなどがあります。キビと名につくタカキビやサトウキビは，キビ属ではありません。

＜人との関わり合い＞

食用のキビがぷっくらとした3mmほどの小穂をつけるのに対し，ヌカキビの小穂は小さく，花序あたりもまばらで効率的に種子を集めることができないため，これまで食用として利用されてきた事例は聞かない。また，キビの種子には下痢や胃痛などに対する効果があり，中国では薬用に利用されるが，ヌカキビの種子の利用は報告されていない。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：設定はない　※黍：秋】
この草も里地にありふれた草だが，これまで俳句や短歌で扱われてきたことはほとんどない。
【参考：黍】
いにしへの邯鄲に黍熟れにけり（加藤秋邨）　　夕風の底這ふけむり黍を焼く（石川桂郎）